

御神樂には祿なし、事はてぬれば本殿に還御なる。此御神樂は、一條院の御時よりはじまる。隔年に行はる。承保より行はる。○行はる恐衍文年々の事に成にけり、壽永の亂によて、内侍所西海に渡御なりて、三年をへて事故なく都へかへり参し時は、三箇夜の御神樂などありき、それは別して臨時に行はる。○下略

〔二代要記一六條〕長保四年五月五日、内侍所御神樂始行。

〔内侍所御神樂部類〕天承元年十二月六日己巳、今夕内侍所御神樂也、藏人忠重爲行事奉仕御裝束其儀、

母屋東第三間神本自西戸懸新調御簾

同第四五間敷滿弘莖第四間如故懸燈樓新帳也第五間立大宋御屏風三帖南北西立之、南間中

内供御半帖一枚爲御拜座東向南廂東第三四五間等懸其内敷滿差筵同第三間副御簾敷兩面端

帖一枚爲内侍座同第四間東西北立廻大宋御屏風三帖其内敷高麗帖二枚其上供厚圓座一枚

南其前立御火爐積炭爲御神樂御座同第五間副御簾敷兩面端帖一枚爲殿下御座當于東第四間

庭去砌七尺主殿寮舉庭燎

其南四行敷座一方各二行也、本方有西、爲本末召人座、每座前生炭居、西行敷黃端帖爲殿上人座

生火不居、衝重例也東西南三面主殿寮引班幘東、西、南、北、有、衝重、職、司、給、之、西行敷黃端帖爲殿上人座

衆座雜色、西、所、衆、東、生、火、不、居、衝、重、云、云、春興殿東西土廂敷假板敷打簾代懸御簾爲女房見物所自南殿東掖階至

軒廊更南折至春興殿南妻戸際修理職渡長橋掃部寮敷筵道至春興殿内、并内、侍、所、西、戸、下、敷、也、御殿東廂御座間

圓○此下恐有脫字左右立燈臺各一本供燈有打自同額間至南殿御後西北妻戸敷筵道

南殿不敷之押年中行事障子返燈樓綱如例、

乘燭大膳内藏等持參御幣供物等、行事藏人檢察之、令催參典侍掌侍各一人新中納言少輔調供件物終